

文錙藝術中心 獲日雜誌報導

學校要聞

【本報訊】文錙藝術中心日前獲日本《千趣万香》10月號雜誌報導。該雜誌「台北俱樂部」專欄中，可看見主任張炳煌揮毫的身影，文內述說其傳承書法教育的精神，並以圖文引領讀者了解文錙藝術中心、數位e筆及海事博物館等，更介紹數位e筆特色。張炳煌表示，「此為日本藝文類雜誌，內容囊括日本及全球藝術文化，很榮幸有機會宣傳本校在推廣藝文教育之特色。除此之外，我近期利用假日遠赴馬來西亞、韓國、澳門等地進行書法展出，透過每次的交流，期能增加淡江在藝術領域的國際能見度。

」

千趣万香³⁰

2016 October

目次

誌上プロダ

西安倶楽部

アトリエ訪問「中国書法家・張炳煌」
中国必見「美術博物館ガイド②」「西安交通大学博物館」
書展紀行「謝振斌」

台北倶楽部

名所散歩「九峰」
ぐるぐる店「鼎泰豐」

ソウル倶楽部

アトリエ訪問「金澤東」
グルメ店「明洞ノ進士完」
ソウル必見「美術館博物館ガイド①」「国立古宮博物館」

アーカイブ特集③

「王羲之全書館（抄）」①

ぶらぶら美術展散歩②

「上門康男のなんでも見てある記」



菅原書房

台北倶楽部

三ハオ! 張炳煌老師!!

張炳煌先生は、小社主筆菅原君の30年間の無二の親友であり、私が生命で2017年6月から18年7月まで2年余にわたる中国語の習得のために台北に派遣された際には、張先生の帝内長安西園にあるオフィスに「駐在員」という名目で居候をさせて頂いた。そして先生には、みっちりといろんなことを教え込まれ続けた。なので先生は私にとっては、大学卒業後の教師そのもの、台北には、足る!



(/)向けて寝られないのである。今後も毎日の糧では、1枚のスタッフでもって、先生の教習を“通”っかけていけというの。これまた主筆の命令である。乞に期待! (大東)

淡江大学 文錫芸術中心(1)

張炳煌先生が教授として書法研究室主任・文錫芸術センター所長を務められている淡江大学のキャンパスは、いわば台北の「都の西北、淡水の河口に〜」といった風景の、東にそびえる名無難明山の西麓、淡水河の河口から東シナ海に突き出した岬の付け根に位置する風光明媚なエリア、新北市淡水区にある。

台北市の中心、台北駅（台北車站）から目黒T・淡水線で終点の淡水までは約30分ほどの距離。駅前から急な坂道を登る形になるキャンパス内の通学路は、お年寄りの先生方にはちょっときつい感じだが、張先生は台北のご自宅から運転手付きのベンツで通勤されているから、その辺は心配ない。そして高台にあってはキャンパスからの眺望は最高で、晴れた日の夕方、河口の先の西の海に沈む夕日はたまたえようのないほど美しい。

そしてキャンパス内には、張先生の研究室というか“学内オフィス”は少なくとも3か所あり、先生を探すのは一苦勞(?)でもないが、とにかくいい先生なのである。



▲文錫芸術センターの前で張先生と

その3か所のひとつは、淡江大学が草創期に商船関係の学部を持っていた名残という海事博物館。客船の船体を模したような設計のビルで、1、2階に見事な船の模型などが展示され、その最上階（3階）に書法研究室がある。さて広くはないが、書法関連の図書等も完備しており、先生が淡江大と共同開発している「e筆」関係の会議や実験なども、多くはこのワークスペースが使われている。

そして次が、文錫芸術中心（展覧室）。ここは校長室が直轄する同大の音楽堂・展覧室など芸術分野の教学推進施設で、展覧室内のオフィスには常時2名の秘書が常駐。張先生が学内で開かれるイベントのほとんどはここで開かれます。

3つ目の張先生記念図書は、張先生が専ら書道研究の李奇茂先生の共同研究である。ここは中庭にモセンの敷かれた大棟が作り、100坪毎坪編成で作られる静かな作業室となっている。

▲展覧室の内部



▲夕時の淡水河原



▲客船のような海事博物館



▲書道入門講座を聴講中の張先生